

戦後日本資本主義の「基本構成」分析試論

——欧米類型からアジア類型（日本・アジア NICs・中国）としての再定義——

報告者：涌井秀行

I. アジア資本主義を指定するうえでの分析の枠組

(1) 構造

I 巻レベル 《外生循環構造》

【労働対象・手段の国外依存・輸入（直接投資：カネ）＝分割工程での加工組立＝労働対象の輸出】 冊子 P10

II 巻レベル

I C+V+M	I C+V+M
II C+V+M	II C+V+M

一国の再生産構造を他国が代位＝補完する関係（後述：冊子 p.7 第2図：米軍事 I B→欧州 EU へ～アジア）
＝レギラシオンの文脈＝

フォード的蓄積様式：国境内での生産と消費（労働者の賃上＝成長「蓄積」）高度成長期の資本主義は、クローズドな国民経済の枠組みの中で労働組合の団結権＝団体交渉権を背景に高い賃上げを実現し、それが内需（個人消費）を拡大し生産拡大につながるという好循環を形成。〔労働者の所得上昇＝資本の成長・蓄積〕

機械制大工業：（少品種）大量生産

↓ 国境の溶解

〔労働者の所得上昇≠資本の成長・蓄積〕 機能障害・不全 グローバル経済（国境溶解）の枠組みの中では、逆に国際競争力を阻害する高コスト要因に転化

最終消費者は国境外に＝蓄積にとって不可欠となる輸出

（もともと 1970 年代のスタグフレーション理解のための論理構成）フォード的蓄積様式の終焉＝これに代わる発展の生産様式が模索される。

ポスト・フォーディズム

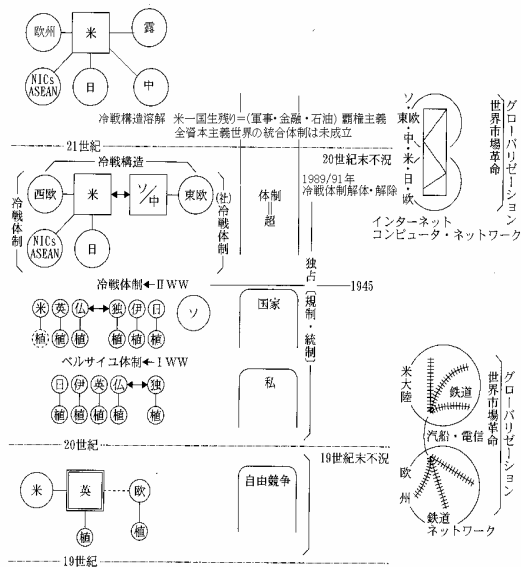
ボルボイズム

ネオ・フォーディズム（トヨタイズム）

【プラン問題】

- ①一段的な抽象的な諸規定。したがって、それらは多かれ少なかれすべての社会形態にあてはまるが、しかし以上に説明した意味でそうなのである。
- ②ブルジョア社会の内部編制をなしてい基本的な諸階級がそれに立脚している諸範疇。資本、賃労働、土地所有。これらのものの相互関係。都市と農村。三つの大きな社会階級。これらの階級のあいだでの交換。流通、信用制度（私的）。
- ③国家の形態でのブルジョア社会の総括。それ自身にたいする関係のなかで考察されたそれ。「不生産的」諸階級。租税。国債。公信用。人口。植民地。国外移民。
- ④生産の国際的關係。国際的分業。国際的交換。輸出入。為替相場。
- ⑤世界市場と恐慌。

図 世界システム-「諸国家の体系」



(2) 歴史と構造

冊子 P7 第2図アジア資本主義形成——歴史と構造参照

（ご覧ください。簡単な説明をします）

注意点：1979年 OECD 規定（停滞のアジア～成長のアジア）

実は日本をどう位置付けなおすかが提起された、ともいえる。欧米資本主義の亜種、あるいはアジアの例外と

しての「工業国」日本、Ⅱ大戦前は妥当。L日帝＝「鳥なき里の蝙蝠」方法論的に言えば「型制規定」可能
 一国（宗主国＝植民地）分析可能＝山田『分析』

しかし戦後日本資本主義はどうか。

欧州・ラ米 NICs 内包的工業（フォード的蓄積様式）化の失敗
 その後も日本を中核に 80年代快走するアジア NICs→90年代中国

（アジア NICs 例外）

冊子 p.10R29 中国の評価「両頭在外・・・」

【外生循環構造】

一国の農業＝工業・再生産構造の放棄＝アジア資本主義（Ⅱ大戦後後生成した）

「型制」・一国構造を構築し得ない（外からの資本主義発展の道を歩む）

後述歴史的役割＝位置（資本主義の新時代を作ることができるか）

この視点から戦後日本資本主義を指定する試み（試論）

冊子 11 頁 「2.アジア類型の原型としての戦後日本資本主義をとえるための吟味・分析点」

- (1) 【第Ⅰ部門の過剰】井村批判（個人消費が過剰を解消？ 冊子 p.12R 井村論述）
- (2) 【全部門の過剰と脆弱な個人消費とそれを代位＝補完する外需（輸出）】
- (3) 【零細土地所有】

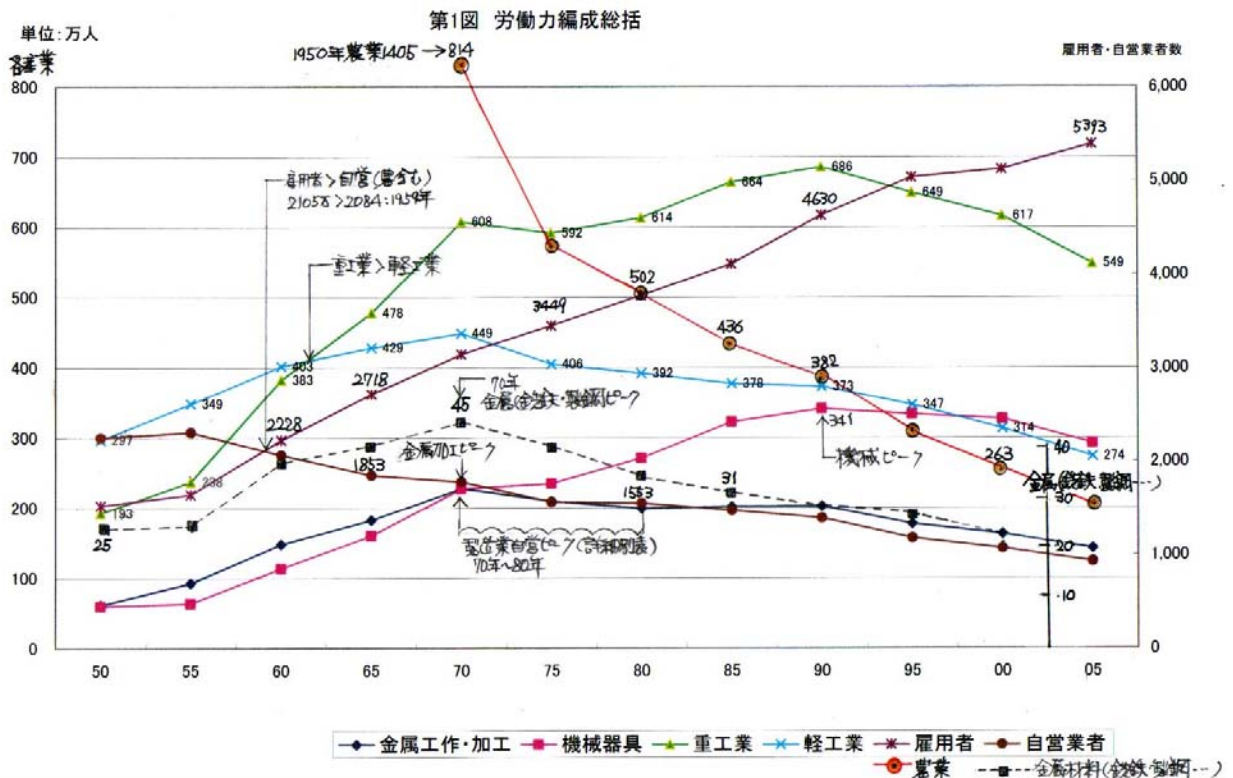
(1) と (2) →内部応答的な再生産構造が、ともかくも「ある一時期」でも成立したか否か。

まずは、この1点に**全神経を集中**させる。

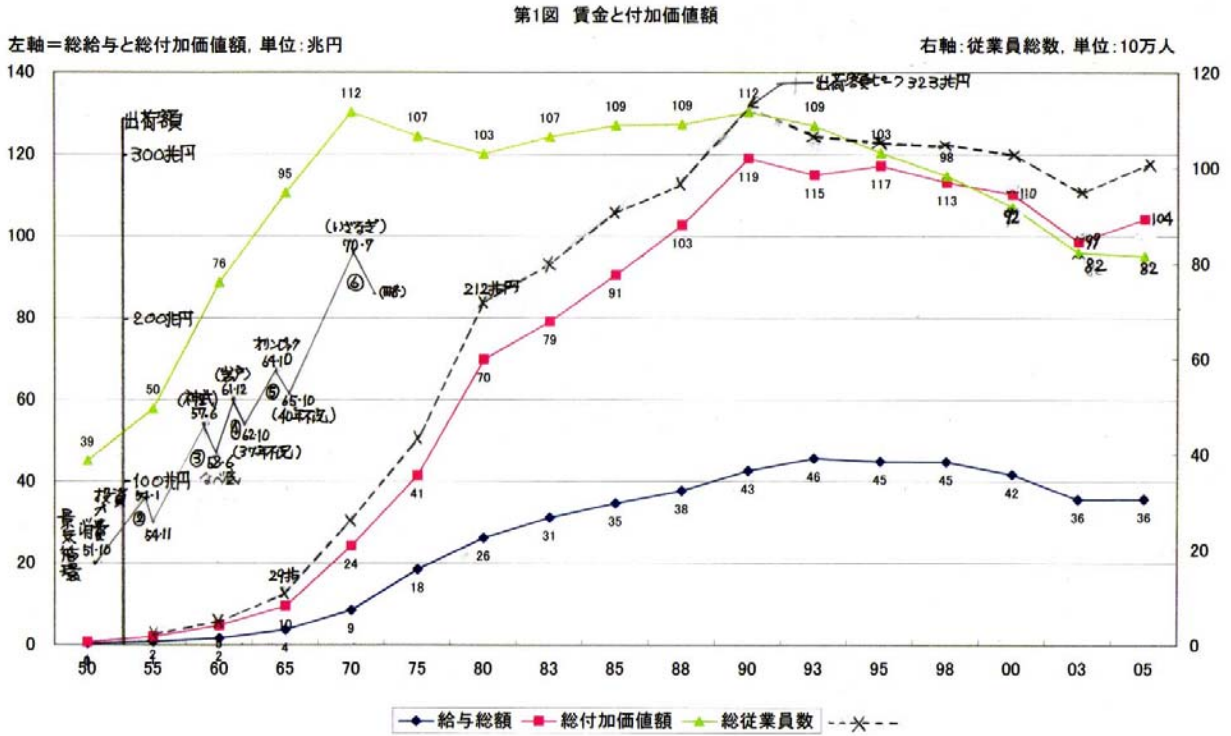
(2) の個人消費の吟味戦後日本資本主義の再審・総括

井村批判（冊子p.14R130）「なお国民総支出の構成比の国際比較では、日本の『固定資本形成』の比重の群を抜いた高さ
 『個人消費支出』の比重の非常な低さが注目されたが、しかし『個人消費支出』もアメリカ、イギリス等よりはるかに高い率で拡大した点（下線は涌井——以下同じ）、注意しておく。『個人消費支出』も高率で拡大したが、『固定資本形成』がこれをはるかに上回る率で拡大したのである。」

第1図 労働力(国勢調査＝労働力実数)編成表 参考にしながらか分析時点（断層撮影面）の特定

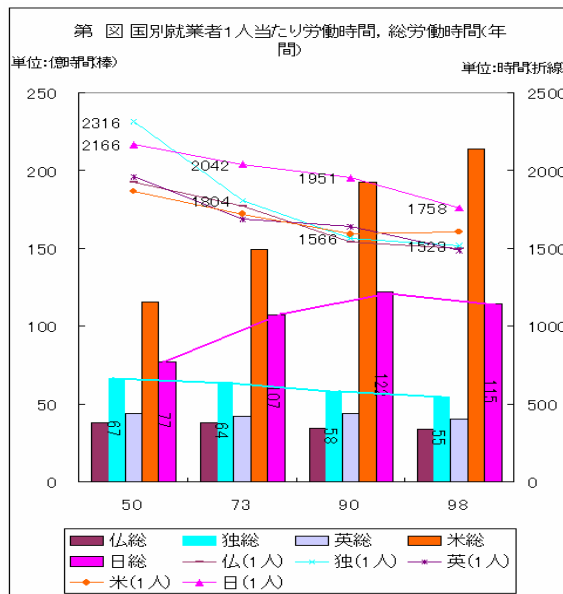
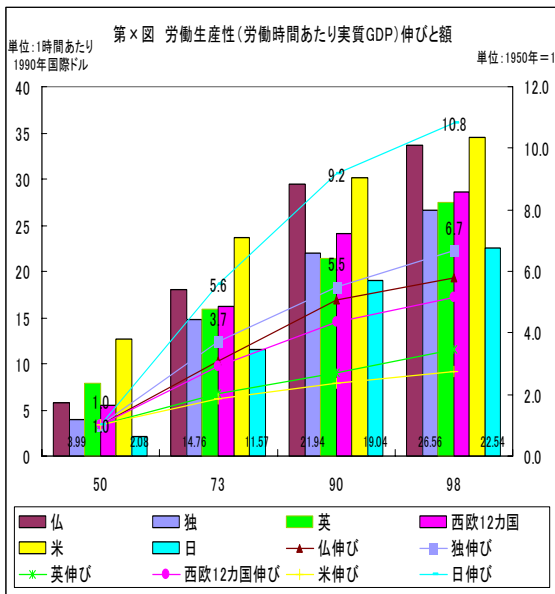


- (1) 1959年 雇用者数 2105万 > 自営業(農業含)者 2084万
- (2) 1961/62年 重工業労働者数 > 軽工業労働者数 (国調ベース 1960年重工業 383万人, 軽工業 403万人)
- (3) 循環局面 第3循環 [1954/11~57/06(神武)~58/06] 拡張 31ヵ月
 第4循環 [1958/06~61/12(岩戸)~62/10(S37年不況)] 拡張 42ヵ月
 第5循環 [1962/10~64/10(オビッパ)~65/10(S40年不況)] 拡張 24ヵ月
- (4) 製造業労働者数ピーク 1970年 (国勢組替表 1057万, 1990年 1059万)
 (工業統計表 1116万, 1990年 1117万)



工業統計表ベース

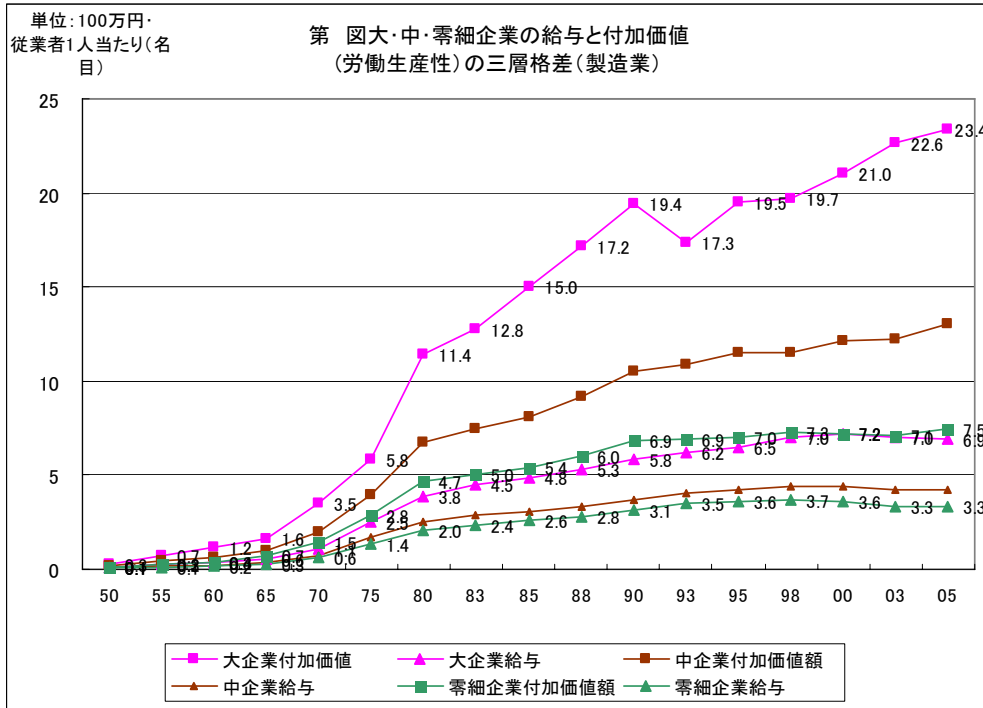
- 【吟味点】 (1) 『個人消費支出』も高率で拡大 (井村) →
 冊子第3図から言える事は, 第1, 2次高度成長時期 いずれも最低の伸び【論拠1】
 (2) 労働者数の絶対的増大 (50年 386万人→70年 1116万人) と個人消費



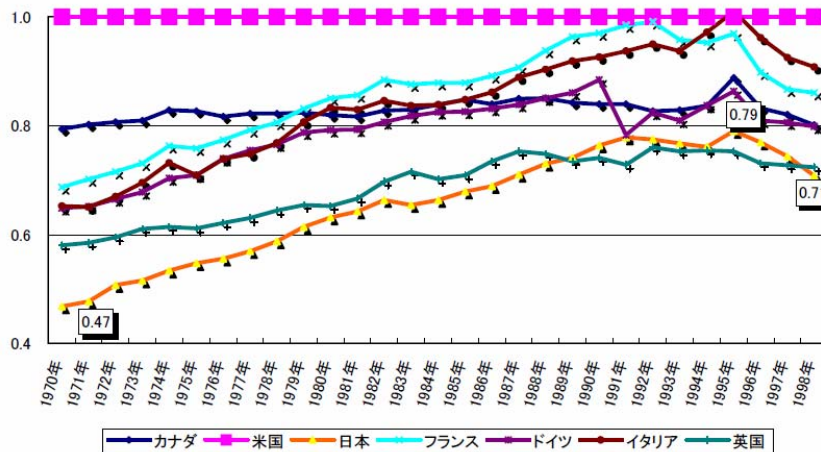
比較 西独 労働生産性の上昇＝総労働時間（67億→64億→58億時間）減少

従業者1人当たりの労働時間減少（2316→1804→1566時間）＝賃金上昇労働時間減少
→個人消費の厚み増,

日本 労働生産性の上昇＝総労働時間（77億→107億→122億時間）増加 密度(Cf;生産性の急上昇)
常に大 要注意：生産性における三層格差従業者1人当たり労働時間減少



(図2)先進主要7カ国の労働生産性の推移(各年米国=1)



タイトル「労働生産性の国際比較(2000年版)」

発表日 2000/11/15

財団法人・社会生産性本部

http://activity.jpc-sed.or.jp/activity_detail.php

「一億総働き蜂・ワーホリック・過労死・社畜・企業戦士・ウサギ小屋の住む・・・」の「ニックネーム」
労働生産性上昇による「成長」蓄積もさることながら「がむしゃらに働く企業戦士の増大」

産業部門内部の「循環の問題」は「構造の問題」「過剰の問題」に転化し、戦後の「全機構的な制約」は、1965(昭和40)年「戦後最大の構造的不況」,「過剰生産恐慌」として現出

最終需要としての個人消費と未対応（設備投資などの中間需要）
結局ベトナム特需・「いざなぎ景気」・輸出によって乗り切る
それにしてもその後の日本資本主義の強・高蓄積は何によるのか。輸出だけか？
(3) 冊子 p.16L20 第 3 点基本構成・蓄積メカニズムの核としての【零細土地所有】
農地は本報告ではふれない。

都市の【零細土地所有】（小規模住宅地所有）の種もアメリカによってまかれた。

1945 年 11 月 24 日 GHQ 「戦時利得の除去及び国家財政の再編成に関する指令」

1956 年地価騰貴（投機）元年

■ 蓄積の培養容器＝地価上昇→含み益（キャピタル・ゲイン）の発生（オフ・バランス；簿外益）

「含み益『担保』大独占系列融資」・中小零細「土地担保融資」赤字経営のバッファ

■ 勤労者【零細土地所有＝小規模宅地所有】→銀行（大独占）への利子（勤労所得）還流，所得再配
分 V の M への再転化

この蓄積メカニズム【含み益】＝擬制資本が外資（アジア NICs ・ 中国）代替

小活

冊子 p.22L 第 2 パラグラフ

戦後日本資本主義は、アメリカの冷戦体制構築という
世界プロジェクトの一環として（外から）日本政府も関
与して（上から）立ち上げられたのであるが、その時本
来無価値であるはずの土地を資本と見立てたのである。
右肩上がりの地価の「含み益」は、およそ 40 年間（1951
年～1990 年）継続し、企業・資本の借入れを可能にし、
生産設備などの現実資本に転化した。「土地神話」で生
み出され現実化した資本は 1970～80 年代を通してフル
稼働し、このメカニズムは十全に機能した。戦後版「高
率現物小作料」（「半封建制」）である。外からの「論理」

が日本の根底を捉え「内的論理」に転化したのである。
しかしこれが「始まり」なら「終わり」はその機能障
害と対応する。土地神話の崩壊＝蓄積機構の機能不全＝
金融恐慌と外需（円建て輸出）の頭打ち・先細りと産業
空洞化（「三層格差＝系列編成支配」の崩壊）という複
合要素が平成不況と続く 21 世紀初頭の停滞となって現
れていく。それは【戦後日本資本主義の基本構成：国内
での内部応答的な再生産構造を確立し得ないまま外需
を再生産の必須条件とする構成】の機能不全ともいえる。

III 戦後日本資本主義のアジア資本主義としての再定義

——平成バブルの生成・崩壊過程の検討をとおして——

以下冊子 p.22～29 にそって説明します。

参考冊子 p.27 第 12 図の補足表

IV まとめ（p.29～31）

戦後日本資本主義の基本構成と性格規定

擬似封建的性格（1）（2） 外生的性格（3）

アジア資本主義の歴史的 position と役割

詳細は論文（ここをクリック）<http://www.meijigakuin.ac.jp/~hwakui/index2.html>

「人類史の通過点としてのアジア資本主義と日本—戦後日本資本主義分析の耕運のために」

（『国際学研究』明治学院大学国際学研究会，第 30 号，2006 年 10 月